

20042

冠動脈CTA検査における5年間での心事故発生率の検証

背景マルチディテクターCT(multi-detector row computed tomography: MDCT)による冠動脈CTA検査(coronary CT angiography: C-CTA)において、狭窄度の評価は心臓カテーテル検査(coronary angiography: CAG)と同等とされている。様々なデータを見ると、64列MDCTによる冠動脈狭窄病変の検出能は、感度(sensitivity)が90~99%、特異度(specificity)が83~97%、陰性的中率(negative predictive value: NPV)95~100%と報告されており、特にNPVが高いことでC-CTAで有意狭窄が無ければ、冠動脈疾患を否定できるとされている。目的当院でC-CTAを行い有意狭窄無しと診断された症例において、現時点での心事故の発生の有無を検証した。対象2008年4月~5月で64列MDCTによりC-CTAを撮影した197例から、冠動脈有意狭窄を51%以上とし、狭窄無しと診断された86例の検証した(描出不良により診断を行えなかった症例を行えなかった症例を除く)。方法対象症例において、2013年5月まで5年間での心事故発生の有無を検証した。結果今回検証を行った症例において、5年間での心事故発生が認められなかった症例は100%であった。再度C-CTAを行った症例は13.0%(11例)で、有意狭窄無しと診断された。また、その後CAGを行った症例は5.8%(5例)で、全て症例において有意狭窄無しと診断され、その内緊急CAGの症例2例(2.3%)は冠攣縮性狭心症(vasospastic angina: VSA)であった。結論2013年5月までの5年間での心事故発生率は0%で、C-CTAのNPVが高いことが証明された。

評価1	評価2	評価3	採否
発表日時 月 日 (第 日)	セッション	会場	時 分~ 時 分

受付番号

演題番号